

研究紀要

第35号

—設立40周年記念号—

研究紀要

第35号

—設立40周年記念号—

公益財団法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

上川名式と花積下層式の交流 —縄文時代前期初頭における文様描出方法の統一化について—	鈴木 宏和
中矢下遺跡A区出土石槍の再検討 —縄文時代前期後半の石槍との比較—	水村 雄功
縄文石器を対象とした型式設定における一試論 —縄文時代前期の押出型石匙を対象に—	入江 直毅
特殊器台弧帯文の施文方法	小林 萌絵
方形周溝墓の研究とキョウダイ原理をめぐって	福田 聖
埼玉県新井堀の内遺跡における埋蔵銭	上野真由美
近世町屋における鍛冶関連遺物の廃棄状況について	高橋 杜人
栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について	水村 雄功
近世遺跡出土針葉樹材の簡便な保存処理方法について	井上 真帆 野中 仁
古代から教室へのメッセージ事業について	藤田 栄二 田中 広明 堀内 紀明

2021

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



写真1 ベルギー ボッホ・フレール社

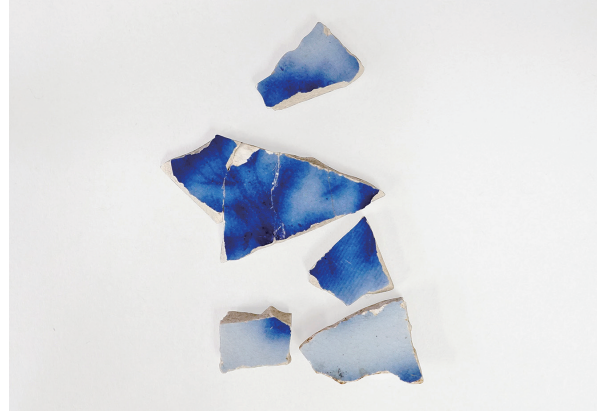


写真2 イングランド ドーソン社

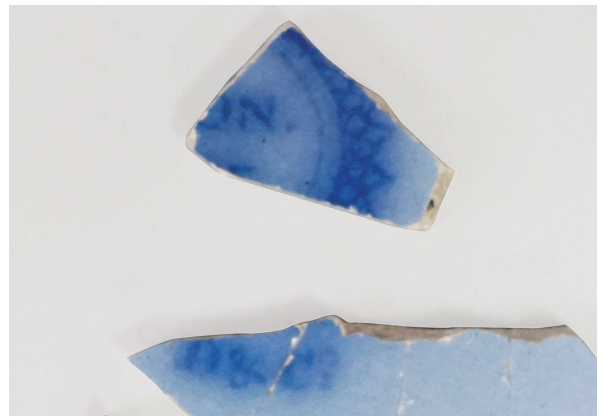


写真3 スコットランド
ジョン&マシュー・パーストーン・ベル社



写真4 イングランド ジョンソン・ブラザーズ社

(水村 栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について)

目次

巻頭図版

序

上川名式と花積下層式の交流 ……………	鈴木 宏和 (1)
— 縄文時代前期初頭における文様描出方法の統一化について —	
中矢下遺跡A区出土石槍の再検討 ……………	水村 雄功 (21)
— 縄文時代前期後半の石槍との比較 —	
縄文石器を対象とした型式設定における一試論 ……………	入江 直毅 (35)
— 縄文時代前期の押出型石匙を対象に —	
特殊器台弧帯文の施文方法 ……………	小林 萌絵 (55)
方形周溝墓の研究とキョウダイ原理をめぐって ……………	福田 聖 (65)
埼玉県新井堀の内遺跡における埋蔵銭 ……………	上野真由美 (91)
近世町屋における鍛冶関連遺物の廃棄状況について ……………	高橋 杜人 (107)
栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について ……………	水村 雄功 (123)
近世遺跡出土針葉樹材の簡便な保存処理方法について ……………	井上 真帆 野中 仁 (147)
古代から教室へのメッセージ事業について ……………	藤田 栄二 田中 広明 堀内 紀明 (157)

中矢下遺跡 A 区出土石槍の再検討

— 縄文時代前期後半の石槍との比較 —

水村 雄功

要旨 飯能市の中矢下遺跡 A 区では、縄文時代草創期と推定される石槍が単独出土で複数個体確認されている。この石槍は、旧石器時代終末から縄文時代草創期の石槍には見られない石材が用いられ、当該期には埼玉県西部の在地石材を利用している集団の存在が推定されていた。

しかし、縄文時代前期の石槍は、単独出土状態であるとしばしば縄文時代草創期の石槍と誤認される傾向にある。縄文時代前期の諸磯式土器に共伴するとされる片岩や粘板岩、ホルンフェルスなどを素材とする石槍は、主要剥離面あるいは自然面を大きく残し、周縁を加工するという特徴がある。中矢下遺跡 A 区出土の石槍と多摩ニュータウン No.753 遺跡の縄文時代前期後半とされる石槍を比較した結果、石材・加工技術ともに類似点が確認された。ここでは、出土した石槍を比較し、中矢下遺跡 A 区出土石槍の時期について再検討する。

はじめに

2018 年 11 月に開催された岩宿フォーラム 2018「大形尖頭器の技術組織—岩宿時代の終焉を探る—」にて、筆者は大宮台地をはじめとする埼玉県内、及び東京都の武蔵野台地出土・表採の旧石器時代終末～縄文時代草創期（以下縄文時代移行期）に比定される槍先形尖頭器（以下石槍 註 1）の集成を行った（水村・大久保 2018）。

大宮台地、武蔵野台地北東部、埼玉県北西部で見られる当該期の石槍は、単独出土・表採資料のみであり、石器集中を持つ遺跡がないという大きな特徴がある。そのような状況の中、単独出土でありながらも複数個体の出土が確認されている稀有な遺跡として、中矢下遺跡 A 区の事例紹介を行った。ここで問題となったのが石槍の年代認定である。

縄文時代移行期の石槍は形態や大きさ、利用石材から評価されることが多い。しかし、長さ 10cm 未満のいわゆる中・小形石槍は石器集中を形成していない限り時期の判別が困難である。

また、縄文時代前期中葉から後葉にかけて東北地方を中心に分布する押出型石槍とは、製作技術に差異が認められないことがさらに石槍の帰属時期に関して混乱を招いている。現に、岩宿フォーラムで集成した資料の中には、縄文時代前期の石槍が若干含まれていた（註 2）。

シンポジウムでは、利用石材の傾向及び石器集中が検出されていないことから、群馬県武尊山や長野県八風山の黒色安山岩、群馬県赤谷層黒色頁岩、多摩川のチャートや頁岩を主体的に用いる集団による「狩場」、或いは関東各地域のキャンプ地を結ぶ通過点に過ぎず、集団の拠点にはならなかったと結論付けた。一方で、埼玉県中央～西部の在地石材を用いる集団が少数存在し、縄文時代移行期の当該地域で石槍製作を行っていたことを中矢下遺跡 A 区出土資料から推定した（水村・大久保 2018）。

しかし、岩宿フォーラムで報告を行った後、共同報告者であった大久保聡氏より、大田区郷土資料館の企画展図録に、縄文時代前期後半の遺物集

中に中矢下遺跡A区出土石槍と石材やプロポーシオンが酷似した石槍がみられるという指摘があった。

大田区郷土資料館の平成20年企画展図録『雪ヶ谷貝塚 縄文時代前期の文化と環境』と東京都埋蔵文化財センターが1999年に刊行した『多摩ニュータウン遺跡—No.753 遺跡—』の報告書をあたると、確かにそこには中矢下遺跡A区出土石槍に酷似したものが多くみられた。

以上の経緯から、本稿では縄文時代草創期と位置付けられている中矢下遺跡A区出土石槍について、出土状況の検討及び縄文時代前期後半の石器集中に伴う石槍と比較を行い、再評価を試みる。

1 縄文時代移行期の大型石槍の概要

旧石器時代・縄文時代草創期の狩猟具の編年は、広義のナイフ形石器に始まり、槍先形尖頭器、細石刃、大型石槍、有舌尖頭器と変遷していくことがおおむねの傾向である。

また、細石刃石器群の終焉後である縄文時代移行期にかけて、槍先形尖頭器石器群の復興と尖頭器の大型化が認められることが一般的である(註3)。その最たる例が、いわゆる神子柴・長者久保系の石槍である。

その後縄文時代へ移行すると、槍先形尖頭器は有舌尖頭器、そして石鏃へと主要な狩猟具が取って代わっていく。

なお、関東地方の縄文時代移行期の石器群変遷については、橋本勝雄氏により整理されており、以下の大きく4時期に分けられる。

1期は北方系細石刃石器群の波及である。2期は二時期に区分しており、2a期は神子柴文化の南下がみられる時期で、東北系珪質頁岩を多用した彫搔器・搔器・削器と在地産石材を多用した石槍がみられる。2b期は本ノ木型石槍の出現を特徴とし、遺跡の局所的な分布と在地石材の多様に特徴づけられる。3期は有舌尖頭器の登場で、関

東全域に遺跡が広がるが有舌尖頭器の出土は多くが単独出土である。器種組成は有舌尖頭器に、尖頭器、石斧であり、後半には石鏃が加わる。4期は石鏃の発達で、長脚鏃や円脚鏃等をはじめとする鏃の多様化を経て草創期末以降は三角形鏃が基本形となる(橋本2014)。

このように、狩猟具としての石槍は縄文時代には石鏃へとその役割が変化していく。

しかし、縄文時代早期以降であっても石槍はつくられる。縄文時代前期の東北地方では押圧剥離を用いた精緻で優美な押出型石槍が出現し、その製品が関東地方へもたらされている。

関東地方の縄文時代前期には、この押出型石槍をもとに在地産石材で「模倣」や「模造」が行われた石槍が出現する。この石槍の模造品は本稿の検討課題である縄文時代草創期の石槍との比較に大きくかかわっており、詳細は後述する。

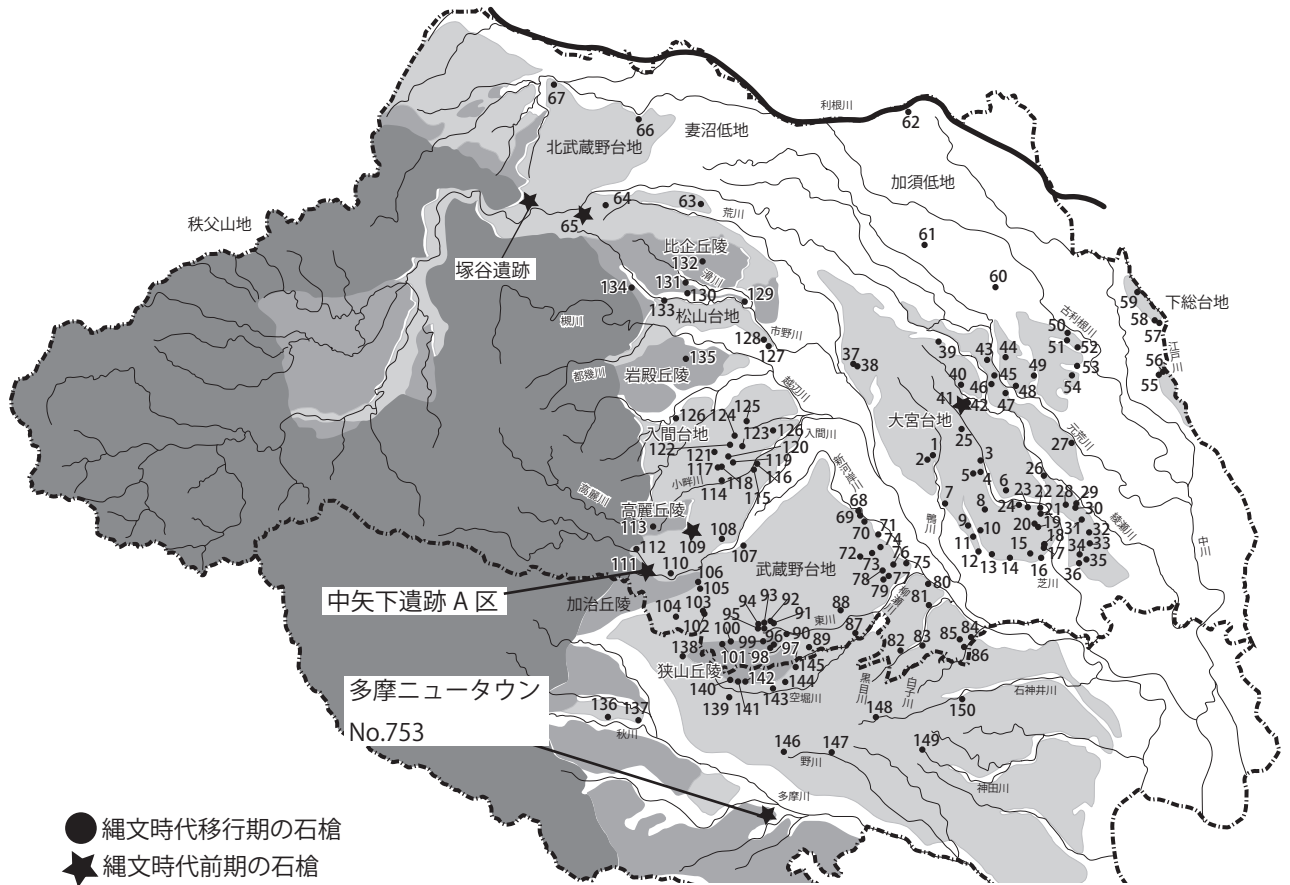
関東地方の大型石槍(第2・3図)

縄文時代移行期の関東地方は、群馬県房谷戸遺跡・荒砥北三木堂遺跡、千葉県元割遺跡、東京都前田耕地遺跡といった大型石槍製作遺跡がいくつか確認されている。それらの製作遺跡では黒色安山岩、黒色頁岩、頁岩、チャートなどを主体的に用いて作られる特徴がある。

また、これら製作遺跡に取り囲まれている大宮台地や武蔵野台地北東部等の現在の埼玉県域に所在する遺跡では、単独出土・表採資料で同様の石材を用いた大型石槍の完成品や使用によって折損したものがみられる。

主な石材産地は、先述したように黒色安山岩については長野県八風山や群馬県武尊山等、黒色頁岩は群馬県赤谷層群、頁岩・チャートは多摩川等である。なお確実に八風山産とされる黒色安山岩の大型石槍は消費地である関東地方では確認されていない(大工原ほか2020)。

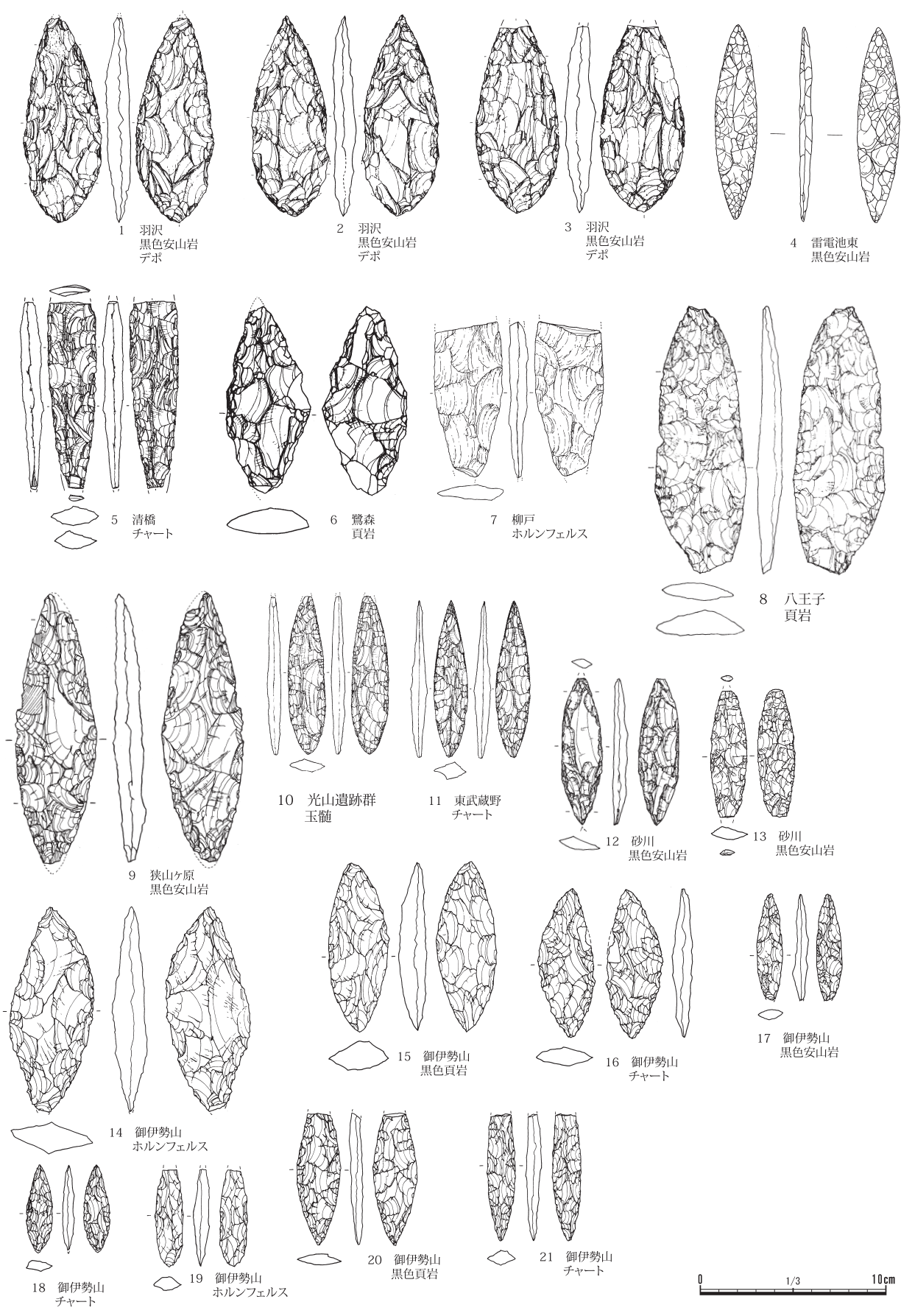
形態は幅広の木葉形、細身の柳葉形を基本とし、いずれも鋭い刃部と先端部を持つ。細身の石槍の



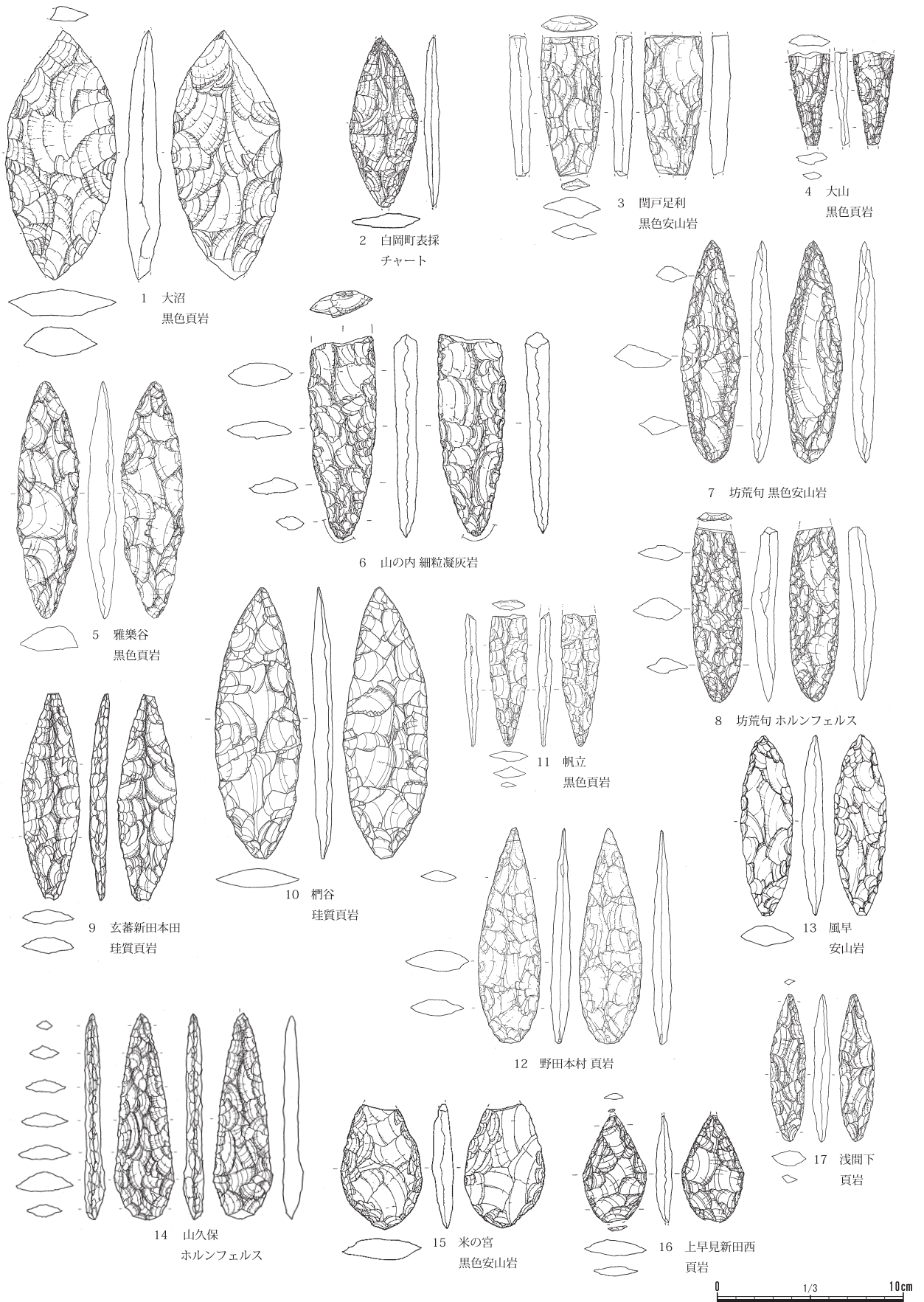
● 縄文時代移行期の石槍
 ★ 縄文時代前期の石槍

番号	市町村名	遺跡名	番号	市町村名	遺跡名	番号	市町村名	遺跡名	番号	市町村名	遺跡名
1	さいたま市	埼玉県 埼玉大宮バイパスNo.1 遺跡	38	桶川市	大平遺跡	76	打越遺跡	114	川越市	光山遺跡群	
2		埼玉大宮バイパスNo.4 遺跡	39	伊奈町	薬師堂根遺跡	77	富士見市	松ノ木遺跡	115	川越市	上組Ⅱ遺跡
3		B-22号遺跡(土呂陣屋跡)	40	上尾市	大山遺跡	78	三芳町	八ヶ上遺跡	116	川越市	御伊勢原遺跡
4		B-13号遺跡	41	上尾市	十二番耕地遺跡	79	朝霞市	新開遺跡	117	川越市	青柳遺跡
5		水川神社東遺跡	42	蓮田市	諏訪坂貝塚	80	朝霞市	大山第一遺跡	118	川越市	向山遺跡
6		A-61号遺跡	43	蓮田市	関戸足利遺跡	81	新座市	泉水山・富士谷遺跡	119	川越市	地蔵沼遺跡
7		間の谷遺跡	44	蓮田市	黒浜拾九町遺跡	82	新座市	巖崎山遺跡	120	鶴ヶ島市	柳戸遺跡
8		上木崎三丁目遺跡	45	蓮田市	荒川附遺跡	83	和光市	市場坂遺跡	121	鶴ヶ島市	高倉岩・天神前遺跡
9		山久保遺跡	46	蓮田市	山の内遺跡	84	和光市	吹上原遺跡	122	鶴ヶ島市	雷電池東遺跡
10		中里前原北遺跡	47	蓮田市	帆立遺跡	85	和光市	丸山台遺跡	123	鶴ヶ島市	後B遺跡
11		日向北遺跡	48	蓮田市	天神前遺跡	86	和光市	白子宿上遺跡	124	鶴ヶ島市	一天狗遺跡
12		上ノ宮遺跡	49	宮代町	雅楽谷遺跡	87	所沢市	和田遺跡	125	坂戸市	若葉台遺跡
13		白幡中学校校庭内遺跡	50	宮代町	山崎北遺跡	88	所沢市	武野原遺跡	126	坂戸市	中小坂地区
14		一ツ木遺跡	51	宮代町	金原遺跡	89	所沢市	東の上遺跡	127	東松山市	古凍14号墳
15		大谷口原遺跡	52	春日部市	前原遺跡	90	所沢市	場北遺跡	128	東松山市	古吉海道遺跡
16		明花上ノ台遺跡	53	春日部市	竹之下遺跡	91	所沢市	野中遺跡	129	東松山市	岩鼻遺跡
17		井沼方・井沼方馬堤遺跡	54	春日部市	坊荒匂遺跡	92	所沢市	中砂遺跡	130	滑川町	工業団地内
18		大北遺跡	55	春日部市	風早遺跡	93	所沢市	清橋遺跡	131	滑川町	大谷遺跡
19		中尾中丸遺跡	56	春日部市	作之内遺跡	94	所沢市	番場遺跡	132	滑川町	西の谷遺跡
20		駒形南遺跡	57	春日部市	貝の内遺跡	95	所沢市	砂川遺跡	133	嵐山町	橋戸上遺跡
21		松木遺跡	58	春日部市	浅間下遺跡	96	所沢市	白旗塚遺跡	134	小川町	久保ヶ谷戸遺跡
22		宮本遺跡	59	春日部市	木津内貝塚	97	所沢市	海谷遺跡	135	鳩山町	虫草山遺跡
23		北宿遺跡	60	春日部市	上早見新田西遺跡	98	所沢市	高峰遺跡		東京都	
24		大古里遺跡	61	春日部市	前遺跡	99	所沢市	宮前遺跡	136	あきる野市	代継・富士見台遺跡
25		吉野原遺跡	62	春日部市	米の宮遺跡	100	所沢市	御伊勢山遺跡	137	あきる野市	前田耕地遺跡
26		上野田西台遺跡	63	春日部市	向原遺跡	101	所沢市	比良遺跡	138	瑞穂町	狭山遺跡
27		岩槻城三の丸遺跡	64	春日部市	四反歩遺跡	102	所沢市	狭山台遺跡	139	瑞穂町	残堀東遺跡
28		玄蕃新日本田遺跡	65	春日部市	鶴巻遺跡	103	所沢市	狭山ヶ原遺跡	140	武蔵村山市	八幡山遺跡
29		下野田本村遺跡	66	春日部市	東方城跡	104	所沢市	東武蔵野遺跡	141	武蔵村山市	吉祥山遺跡
30		東裏西遺跡	67	春日部市	二の丸遺跡	105	所沢市	箭ノ根遺跡	142	武蔵村山市	萩ノ尾地区
31		欄谷遺跡	68	春日部市	ハケ遺跡	106	所沢市	坂東山遺跡	143	東大和市	砂野遺跡
32		行衛往還遺跡	69	春日部市	川崎遺跡	107	所沢市	滝祇園遺跡	144	東大和市	上ノ台遺跡
33		海道西遺跡	70	春日部市	上福岡貝塚	108	狭山市	西久保遺跡	145	東村山市	No.54遺跡
34		川口市 吠原遺跡	71	春日部市	鷺森遺跡	109	狭山市	芋久保遺跡	146	府中市	武蔵国分寺関連遺跡
35		川口市 源長寺前遺跡	72	春日部市	本村遺跡	110	狭山市	加能里遺跡	147	小金井市	西之台遺跡
36		川口市 八本木遺跡	73	春日部市	西渡戸遺跡	111	飯能市	中矢下A遺跡	148	西東京市	田無南町遺跡
37		桶川市 大沼遺跡	74	春日部市	羽沢遺跡	112	飯能市	三ヶ谷戸遺跡	149	三鷹市	井の頭池遺跡群
		75	春日部市	東前遺跡	113	飯能市	八王子遺跡	150	練馬区	武蔵関遺跡	

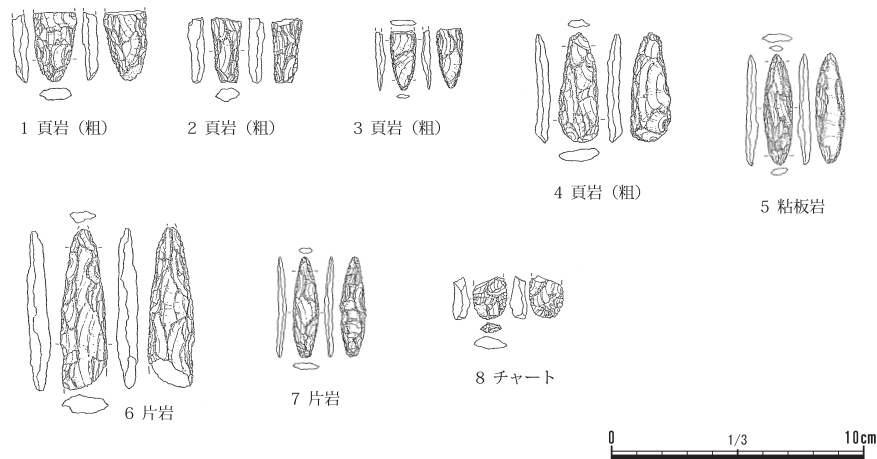
第1図 埼玉県・東京都内における縄文時代移行期・前期石槍出土遺跡分布(水村・大久保 2018 を転載・改変)



第2図 埼玉県内出土の縄文時代移行期の石槍（1）



第3図 埼玉県内出土の縄文時代移行期の石槍（2）



第4図 中矢下遺跡A区 遺構外出土の石槍

中には両側縁部が並行する本ノ木型石槍が含まれる。

また、製作技術面では、大形の板状・ブロック状素材を用い、完成形をイメージしながら周辺から整形・調整加工を繰り返すことで両面調整体を作成し、さらに薄く整形していく所謂「ソフトハンマー成形調整技術」(大工原ほか 2020) がみられる。

小菅将夫氏は両面加工石槍の製作工程は以下のように大きく4工程に分けている。素材獲得段階である第1工程では大形のハードハンマーを用い板状・ブロック状素材を獲得する。第2工程は2aと2bに分かれ、2aでは粗割整形し、この時点で断面形が凸レンズ状になるように整形する。2bでは尖頭器状に整形する段階で、ソフトハンマーで厚みを除去しながら形状を整える。第3工程ではソフトハンマーでさらに形状修正を行い、先端を尖らせていく(小菅 2018)。先端部の仕上げの整形は押圧剥離を用いるケースがある可能性も指摘されている(大場 2018)。

大きさは5cm前後の小形から10cmを超えるような大形、20cmを超える超大形まで、その大きさは多様である。

利用方法は、投槍・突槍のほか、使用痕分析から切道具としての利用が確認されている(註4)。

以上に概観したように、関東地方における縄文時代移行期の石槍は、利用石材や規格性、技術的特性がある程度定形化しているといえる。

2 比較対象資料

(1) 中矢下遺跡A区出土石槍(第4図)

中矢下遺跡A区は飯能市矢嵐字中矢下に所在し、加治丘陵尾根上の東端部に位置する。尾根西部は夕日ノ沢遺跡、段丘の東へ一段下位には中矢下遺跡B区がある。

縄文時代の遺構は、早期の炉穴3基・土壇4基、前期の竪穴住居跡3基・土壇14基、中期の土壇6基が検出されており、縄文時代前期の集落を主体とする遺跡である。土器は黒浜式土器を主体とし、縄文時代前期中葉に位置づけられている。

また、遺構外一括出土遺物では、黒浜式土器を主体とし、諸磯a、諸磯b、諸磯c式土器も多くみられる。

中矢下遺跡A区では、遺構内出土の石器が少ない一方で、遺構外の一括出土遺物として多量の石器が出土している。多くは打製石斧や石鏃であり、製品の多くは掲載されているが、剥片や良質頁岩の石核、二次加工剥片等が未掲載遺物にみられるほか、小形の磨製石斧もある(註5)。なお、旧石器時代の黒曜石製ナイフ形石器が1点みられる

ため、旧石器時代から活動痕跡があるようである。利用石材は片岩、ホルンフェルス、頁岩が主体である。

遺構外一括出土遺物とされているため、土器・石器の分布状況は確認できないが、遺物集中を形成していた可能性が想定される。

中矢下遺跡A区の遺構外一括出土遺物として石槍が計8個体出土している。報告書内では、縄文時代草創期に比定される製品であると推定されている。利用されている石材は、片岩、粘板岩、粗悪な頁岩（註6）等の結晶や節理が発達した剥離性の低い石材（小菅2020）、チャートである。以下に、資料実見による所見を列記していく。

1は粗悪な頁岩でつくられており、裏面下端部に自然面が残る。右側縁部は垂直打撃による階段状剥離が顕著である。また、両側縁部の断面形は丸みを帯びている。

2は粗悪な頁岩でつくられており、裏面の一部に自然面が遺存している。垂直打撃による階段状剥離が顕著である。両側縁部の断面形は丸みを帯びている。

3は粗悪な頁岩でつくられており、極めて薄くスレート状に剥離する。中央に大きな剥離を残し、周縁は石質によるものか細かな剥離痕が連続する。

4は薄くスレート状に剥離する粗悪な頁岩でつくられている。石槍とするには粗雑で全体が丸みを帯びており、所謂石槍状石器と称するような形態である。裏面は大きく剥離しており、階段状剥離がみられた。下端部は資料実見の結果自然面と判断した。また、両側縁部は強く丸みを帯びている。

軽部達也・荻谷千秋両氏は、縄文時代草創期の石斧集成の中で、草創期前・中葉の石斧として位置付けている（軽部・荻谷2002）。

5は粘板岩で作られており、資料実見では石質状判断が困難であったが、裏面は主要剥離面では

なく中央に大きく自然面が残されていると思われる。垂直打撃による階段状剥離がみられ、両側縁部・両先端部は丸みを帯びている。

6は白色で光沢のある片岩で作られている。垂直打撃による階段状剥離が顕著である。全面が著しく摩耗しており、側縁部・先端部が丸みを帯びている。大きさは完形であれば、10cm以上の大形と推定される。

軽部・荻谷両氏の集成では、草創期前・中葉の石斧として位置付けられている（軽部・荻谷2002）。

7は赤褐色の片岩でつくられている。裏面は中心に沿って主要剥離面が残存している。薄手で、両先端部は丸みを帯びる。垂直打撃による階段状剥離がみられる。

8はチャートでつくられているが、剥離が粗雑で、厚みの除去がうまくできていない。基部は丸く、サイズも小形と考えられる。

(2) 多摩ニュータウン

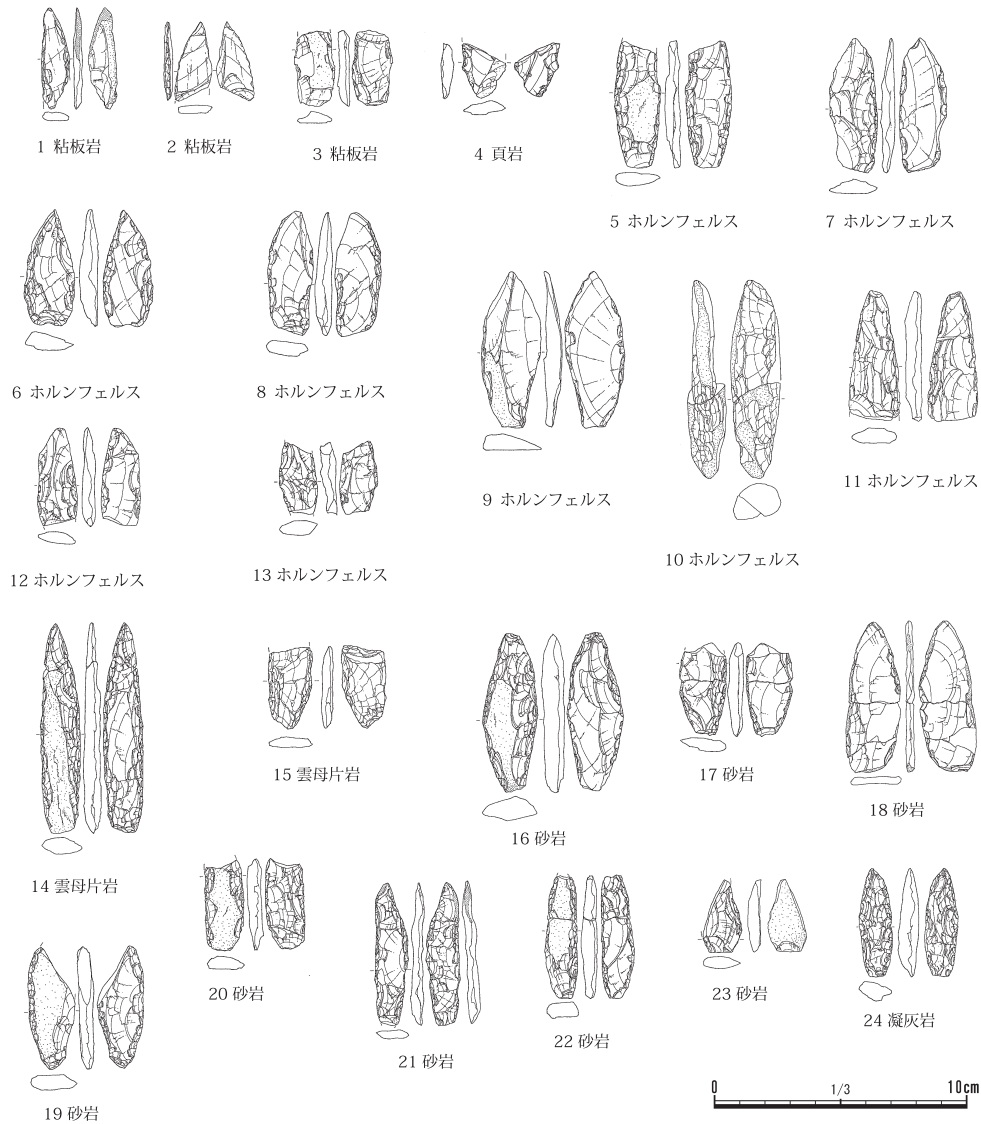
No.753 遺跡出土石槍（第5図）

多摩ニュータウン No.753 遺跡は、武蔵野台地に位置し、縄文時代前期後半の墓壙・遺物集中区を主体とする遺跡である。縄文時代の遺構は集石4基、焼土跡1箇所、墓壙11基、遺物集中地点5箇所である。

墓壙及び、遺物集中区は前期後半に位置づけられ、5基の墓壙と遺物集中区からは諸磯式土器が多量に出土している。また、遺物集中区は墓壙を中心に展開しており関連性が窺われる。

縄文時代前期後半の土器は、30,000点以上出土しており、ほとんどが同時期の墓壙の周囲に分布し、遺物集中区を形成している。また、諸磯式土器の他、石槍や打製石斧をはじめとする総数1,317点の石器類が含まれている。

多摩ニュータウン No.753 遺跡では28点の石槍が出土しており、このうち21点が遺物集中地点①～③から出土している。



第5図 多摩ニュータウンNo.753 遺跡 遺物集中出土の石槍

出土状況を見ると、多摩ニュータウンNo.753では遺物集中区出土がほとんどであり、多量の諸磯式土器と共伴関係にある。多摩ニュータウンNo.753 遺跡出土の石槍が縄文時代前期後半であることは確実である。以下に特徴的な製品について記述する。

5はホルンフェルス製の横長剥片素材で、正面に自然面、裏面には主要剥離面が大きく残る。周縁加工で、先端部は欠失している。断面形は左側縁部が丸みを帯びており、垂直打撃による敲き潰れが示唆される。

11はホルンフェルス製の横長剥片素材で、裏

面に主要剥離面が大きく残る。正面は左右から中央に届く剥離が観察されるが裏面は周縁加工である。先端部は丸く、実用性に乏しい。断面形をみると特に右側縁が丸みを帯びており、垂直打撃により縁辺が潰れていると推定される。

14は雲母片岩製で正面に自然面、裏面中央に剥離面が大きく残る。先端部はシャープな形状だが、断面形状が凸レンズ状で他と比べると側縁部の丸みが弱い。階段状剥離がみられ、垂直打撃による整形と考えられる。

16は砂岩製の横長剥片素材で、正面に自然面、裏面に主要剥離面が大きく残る。周縁加工で、平

面形態は槍状を呈しているが、丸みの強い形状である。直接打撃で周縁加工を施している。断面形状は側縁部に弱く丸みを持つ。

19は16と同様に砂岩製で平面形態や加工の方法、自然面や主要剥離面の残り方に共通性がある。断面形は16と比べて特に左側縁部の丸みが強い。

24は凝灰岩製の両面加工である。器体は肥厚し、断面形状は側縁部に丸みを持つ不整形である。垂直打撃によって槍状に整形されていると考えられる。

このように石槍としてある程度の形を保っているものは、5・11・14・16・19・22・24であり、形骸化した石槍が多くみられる。21のように石槍状を呈するが、形状がいびつな製品もみられる。

また、ほとんどの製品が主要剥離面、自然面を残す。利用石材は粘板岩、頁岩、砂岩、ホルンフェルス、雲母片岩であり、在地系の剥離性に乏しい石材を多用する傾向にある。加工は垂直打撃、直接打撃で、多くは周縁加工である。

10は整形の失敗による未成品であろうか。断面が楕円形の棒状礫を素材とし、整形の初期段階で垂直打撃によって器体中ほどで折損している。

(3) 比較検討

縄文時代移行期の石槍(第2・3図)は平坦剥離によって、厚みを除去し、薄くすること意識しながらおおそ左右対称になるように丁寧に仕上げている。断面形は菱形～凸レンズ状になることが多く、歪みのないものが多い。製作途上の所謂ブランク(第2図1・第3図6・14)であっても、丁寧に印象を持ち合わせている。

調整はほとんどが両面加工で、中軸状に稜がでるように左右から直接打撃で仕上げている。側縁部や先端部はシャープである。形態や細部調整をみても、狩猟具としては実用的な仕上がりである。

一方で縄文時代前期後半に比定される多摩

ニュータウンNo.753遺跡の石槍は、周縁加工が多く、自然面や主要剥離面が大きく残されているものが多い。形態もいびつなものも多く、断面形は側縁部の丸みが強く、不整形なものが多い。直接打撃、垂直打撃を用いており、階段状剥離も確認される。

利用石材の視点においても、節理に沿って剥がれていたりする剥離性の乏しい石材を用いていることから、黒色安山岩や黒色頁岩等の緻密で剥離コントロールがしやすい石材を用いる縄文時代移行期の石槍とは明らかに異なる。

中矢下遺跡A区の石槍は、形態こそ整ったものが見受けられる(第4図5～7)が、断面形は丸みを帯び、垂直打撃による階段状剥離が目立つ。平面形態が整った石槍は、多摩ニュータウンでもみられる(第5図5・11・14等)。また、多摩ニュータウン遺跡程自然面が大きく残る物はみられないが、自然面、主要剥離面を残しているもののみられる。

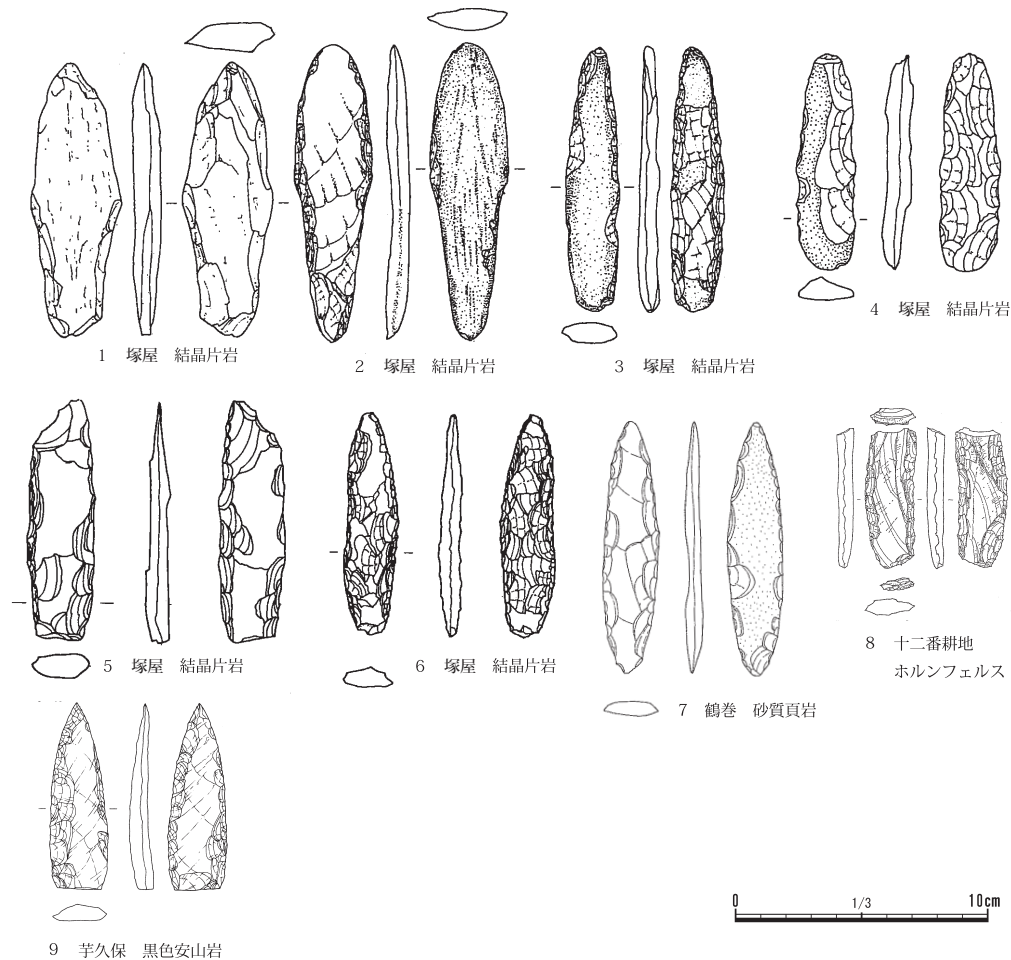
中矢下遺跡A区の石材については、粘板岩、片岩、粗悪な頁岩等の縄文時代早期以降の打製石斧にみられるような剥離性の低い石材が利用されている。

出土状況を見ると、多摩ニュータウンは遺物集中出土がほとんどであり、30000点に及ぶ多量の諸磯式土器と共伴関係にある。一方で、中矢下遺跡A区は単独出土で点在している。しかし、遺構外出土では多量の石器と黒浜式・諸磯式土器が出土している。

以上を比較してみると、中矢下遺跡A区と多摩ニュータウンNo.753遺跡の石槍は明らかに草創期の石槍とは技術や利用石材の面で異なる。また、両遺跡の石槍は技術・石材・出土状況等の共通項が指摘できる。

3 石槍の模造品

大工原豊氏は関東地方の縄文時代前期後半にお



第6図 埼玉県域出土の模造石槍

いて、東北地方を中心にみられる押出型石槍の模造品（註7）がみられることを以下のように指摘している。「地域・集団間の格差により押出型石槍のような高度な技術情報は、うまく伝えられない状態がある。技術基盤のない者が威信材を必要量入手できない状況で、所有願望が高まると模倣（copy）ではなく模造（imitate）といった行為を行うようになる（大工原 2003 p24）。」

模造石槍は同氏によって大きく3群に分類されている。第1群は石鏃系押圧剥離技術で作られたミニチュアサイズの製品である。第2群は垂直打撃技法で作られ、刃部が作出されず、実用品としての機能が損なわれているものである。第3群は旧石器時代の槍先形尖頭器を素材に再加工したもので、下総地域に認められる（大工原 2012）。

また、関東地方における変遷状況について以下のようにまとめている。黒浜式期は類例が少なく、削器系押圧剥離による模造品が製作されている。続く諸磯 a～b 古段階には、群馬・東京・埼玉・神奈川の諸磯文化圏内で、直接打撃による石槍と槍状石器が製作されている。諸磯 b 中段階には、押出Ⅱ型石槍の模造品が製作され、模造品が副葬される事例が継続している。諸磯 b 新段階以降には、直接打撃による石槍は存在するが、模造品は減少している。副葬品としても見られなくなることから使用法などに大きな変化があったことを指摘している（大工原 2003）。

埼玉県内で石槍の模造品を製作している代表的な遺跡は、寄居町の塚屋遺跡である。塚屋遺跡は諸磯 a 期の住居 9 軒、諸磯 b 期の住居 13 軒、加

曾利 E 期の住居 1 軒が検出されている。土壌は諸磯 a・b 期がほとんどで、多量の土器が含まれていることから墓墳的性格とされる。塚屋遺跡では多量の石器が出土しており、打製石斧の製作技術を利用した押出Ⅱ型石槍の模造品が多くつくられている（第 6 図 1～6）。このような形骸化した結晶片岩製槍状石器（註 8）が塚屋遺跡を中心に多くみられ、塚屋型槍状石器という一つの型式を成立させている（大工原 2003）。

また、埼玉県内では単独出土でいくつか確認されており、寄居町鶴巻遺跡では柳葉形の石槍が出土している（第 6 図 7）。石材は報告書では砂質頁岩とされている。実見したところ中矢下遺跡 A 区でみられるような粗悪な頁岩に石質が類似している。実物を見ると、プロポーシオンは草創期の大型石槍に酷似するが、片面に大きく自然面が残存し、周縁加工が施されている。

遺構外出土であるため相伴する土器はみとめられず、鶴巻遺跡で出土している土器の中に諸磯式土器はみられない。

自然面を大きく残し、周縁加工を施す石槍は縄文時代前期後半の特徴とされるため、単独出土ではあるが、当該期の石槍であると考えられる。

上尾市の十二番耕地遺跡では小規模な調査区から遺物集中が検出されており、ホルンフェルス製の石槍が出土している（第 6 図 8）。出土している土器の時期は幅広いが、諸磯式土器も一定量出土している。

上下の端部が欠失しており、ややカーブした形状である。主要剥離面は大きく残され、周縁に加工が施されている。縄文時代前期後半に特徴とされる技術である。

飯能市の芋久保遺跡では、落とし穴と推定されている土壌内から、草創期の石槍が出土している（第 6 図 9）。基部が欠損しているが、平面形は柳葉形である。石材は黒色安山岩であり、薄い剥片を素材としている。草創期に多用される剥離コン

トロールのしやすい石材ではあるものの、両面に剥離面を大きく残し、周縁加工を施していることから縄文時代前期後半の石槍であると推定される。

このように、縄文時代前期後半でみられる石槍の模造品は、単独出土であると草創期の石槍と誤認されることがある。

また、西大宮バイパス No.4 遺跡で検出された草創期のデポとされる高原山産黒曜石製石槍の未成品も然りである。これについては、男女倉型尖頭器のブランクであるとの見解もある。関東地方の縄文時代移行期の石槍に黒曜石製がほぼ認められないため、草創期の石槍と誤認されている可能性も考えられる。

しかし、例外として、草創期とされる黒曜石製石槍は栃木県矢板市の高原山にある原産地遺跡の製品がある。この高原山黒曜石原産地遺跡では、大規模な石槍製作址が検出されている。テフラ分析の結果から草創期であることは間違いないが、西大宮バイパス No. 4 出土の石槍が男女型尖頭器のブランクであるとするれば、関東地方において原産地外では確認できない製品ということになる。中矢下遺跡 A 区の事例と似たようなあり方である。

縄文時代移行期の大型石槍に利用される石材は、黒色安山岩、黒色頁岩、チャート等が主体であり、両面加工で鋭い刃部や先端部を持つ形態的に整ったものが多く作られる。やはりこれらの特徴が、縄文時代移行期の石槍を認定していく上での判断材料となろう。そのような視点でみると、中矢下遺跡 A 区の石槍は明らかにイレギュラーな存在である。

4 結語

以上、縄文時代移行期の石槍と縄文時代前期後半の石槍との比較検討を行った。移行期と前期後半の石槍にみられる特徴をまとめ、中矢下遺跡 A 区出土石槍の時期について検証していく。

縄文時代移行期

- ①黒色安山岩、黒色頁岩。良質な頁岩・チャート・ホルンフェルス等、緻密で節理面が発達していない剥離性に富んだ剥離コントロールのしやすい石材を利用している。
- ②ソフトハンマーによる平坦剥離の両面加工、で断面形が凸レンズ状になるように、左右から仕上げていく。剥離が素材の中央に届くため、中軸に沿って蛇行する稜線が形成される。鋭い刃部と先端部が作出される。
- ③自然面を残すものはなく、中央に大きく剥離面を残すものや主要剥離面を残すものはほとんどみられない。

縄文時代前期後半

- ①粘板岩、片岩、砂岩、粗悪な頁岩等、節理に沿って薄くはがれるような剥離性の乏しい石材を用いている。
- ②垂直打撃や直接打撃で成形し、場合によっては両極打法を用いる。これによって階段状剥離痕が観察されることが多い。側縁部の断面形は丸みを帯びる。
- ③主要剥離面や自然面を大きく残し、周縁を加工することが多い。

なお、利用されている石材について、関東地方の縄文時代移行期においては、黒色安山岩や黒色頁岩、頁岩、チャート等の剥離コントロールが効く良質な石材を利用している。一方で中矢下遺跡 A 区や縄文時代前期後半の遺跡である多摩ニュータウン No.753 等においては、片岩や粘板岩、砂岩ホルンフェルス等の剥離コントロールが効きづらい打製石斧に利用されるような石材を素材とする傾向にある。

以上から、中矢下遺跡 A 区出土の在地石材製石槍は、その技術的特徴と利用石材から縄文時代前期後半に特徴とされる模造された石槍である。

埼玉県は、旧石器時代の遺跡が周辺と比べて極端に少ないという特色がある。特に、縄文時代移

行期は、単独出土資料や表採資料がほとんどで、石器集中を伴う遺跡は皆無である。

このような特殊な状況下の中で、当該期の石槍を判別する際には、従来の研究成果に沿った大小のサイズや形態等から特定していく。そのため、先入観で判断してしまう傾向にある。確かに、サイズや形態の一定の傾向というものは、縄文時代移行期の石槍にはみられる。しかし、これは飽くまで「傾向」なのである。

現に、シンポジウムでは中矢下遺跡 A 区の石槍は草創期であるとし、縄文時代前期の可能性は疑わずに議論が進められた。今回取り上げた中矢下遺跡 A 区の石槍は、縄文時代移行期の石材利用と行動領域を考えるうえで重要な遺跡の一つであったことを考えると、報告者としては反省の思いである。

また、草創期の石器の誤認例は石槍のみに留まらない。橋本勝雄氏は神子柴型石斧を認定する際の問題点を指摘している。旧石器時代前半期の石斧や縄文時代早期から前期前半にみられる石斧を神子柴型石斧と誤認されることが多い（橋本 2018）。

中矢下遺跡 A 区でも神子柴型石斧とされるものが出土しているが、主要剥離面が大きく残るため、早期以降の石斧である可能性が高い。

考古学は蓄積型学問であり、毎年調査・研究成果が蓄積されつつある。過去の成果の再検証の結果、全く異なる結論に達することもある。過去の資料がそのまま現在の議論において有効か否かは検証しなければならない。特に、石器は技術的側面から積極的なアプローチをかけていく必要がある。

石槍の消費地である大宮台地や武蔵野台地北東部等において、石材利用や人の動きを明らかにするためには、正確な石材同定と縄文時代移行期における大形尖頭器の製作技術を理解する必要がある。

また、縄文時代全体を通した石器製作技術等の特徴を理解することも、縄文時代移行期という様々な時代の遺物が混在する不安定な時代を研究する石器研究者に求められている。

本稿を執筆するにあたり、國學院大學兼任講師の大工原豊氏に御助言を賜りました。末筆ながら感謝いたします。

註1 白石浩之氏は著書『旧石器時代の石槍』の中で、「ヤリという道具が道具の発明された歴史的意義を評価して、槍先としての形をもつ石器を石槍（いしやり）と総称することにし、さらにそれを形態的に限定するものとして、木葉形尖頭器、有舌（茎）尖頭器、あるいは東内野型尖頭器などと呼称することにする」（白石 1989,p 3,II.19-23）と述べている。本稿では、これに従い石槍と尖頭器の用語を使い分けることとする。

註2 十二番耕地遺跡・鶴巻遺跡・芋久保遺跡出土の石槍（水村・大久保 2018）は縄文時代前期に比定される模造された石槍であると岩宿フォーラム 2018 にて大工原氏より御教示いただいた。

註3 近年、神奈川県内の西富岡・長竹遺跡で、代官山型段階と野岳休場段階の間に介在する細石刃石器群と小～大形尖頭器が同一レベルの集中部で出土している事例が認められている（麻生 2019）。

註4 長野県神子柴遺跡の使用痕分析により、ナイフのような切裁具としての利用が明らかとなっている（堤 2008）。

註5 中矢下遺跡A区出土石器の未掲載資料について

は、筆者・大久保聡両名が岩宿フォーラム 2018 において「南関東北西部の様相」を執筆する際に資料の確認を行っている。しかし、資料数が膨大であったため、細部までは実見できていない。本文中に記載されている器種や石材は、その際に確認できたものの極一部であということに留意したい。

註6 資料実見の結果、旧石器時代・縄文時代移行期の石器に頻りに利用される石質の頁岩と区別するために、便宜的に「粗悪な頁岩」との名称を付けた（水村・大久保 2018）。入間川で同様の石材が採取でき、見かけは粘板岩に極めて近い。

註7 本稿では、東北系珪質頁岩を素材とした押圧剥離系の模造品は取り扱わず、直接打撃の在地産石材を素材とした模造品を取り扱う。なお、押圧剥離系の模造品は茨城県梨ノ子木久保遺跡等で確認されており、縄文時代草創期の石槍と誤認されている。

註8 塚屋遺跡など埼玉県を中心に直接打撃による石槍の模造品が多数製作されている。多摩ニュータウン No.72 遺跡などでは、縄文時代中期になっても槍状石器が製作されていると大工原氏により御教示いただいた。

参考文献

- 麻生順司ほか 2019 『西富岡・長竹遺跡第3次調査』神奈川県埋蔵文化財調査報告書 74
市川修 1983 『塚屋・北塚屋』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 25 集
大田区郷土資料館 2008 『雪ヶ谷貝塚—縄文時代前期の文化と環境』大田区教育委員会
大場正善 2018 「神子柴集団の石器製作技術」『シンポジウム神子柴系石器群 その存在と影響』ハケ岳旧石器研究グループ
軽部達也・荻谷千明 2002 「縄文時代草創期の石斧」『石斧の系譜—打製斧形石器の出現から終焉を追う—予稿集』pp50-56, 岩宿フォーラム実行委員会
栗島譲一・原川雄二 1999 『多摩ニュータウン遺跡—No.753 遺跡—』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 75 集
剣持和夫 1986 『中矢下・夕日ノ沢・上前原沢・芝口ヲネ・後山北谷・滝尾塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書

第 57 集

- 小菅将夫 2020 「縄文石器の製作技術」『縄文石器提要 考古調査ハンドブック 20』 pp205-221
ニューサイエンス社
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982 「沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巻・水久保・貉久保」
『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書—XIV—』 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第 16 集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985 「三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査
報告—Ⅲ—』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 43 集
- 白石浩之 1989 「旧石器時代の石槍 UP 考古学選書 7」 東京大学出版会
- 大工原豊 2002 「打製斧形石器の系譜」『石斧の系譜—打製斧形石器の出現から終焉を追う—予稿集』 pp10-15,
岩宿フォーラム実行委員会
- 大工原豊 2003 「模倣と模造—硬質頁岩製石匙・石槍の流通と型式変容—」『縄文時代第 14 号』 縄文文化研究会
- 大工原豊 2008 「儀器化された石匙・石槍」『考古学ジャーナル』 578 ニューサイエンス社
- 大工原豊 2019 「東北地方前期の石製儀器類」『季刊考古学第 148 号縄文時代の儀礼と社会』 雄山閣
- 大工原豊・長田友也・建石徹 2020 「縄文石器提要」『考古調査ハンドブック 20』 ニューサイエンス社
- 堤隆 2008 「神子柴遺跡における石器の機能推定」『神子柴 後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかかる移行期
石器群の発掘調査と研究』 pp268-289, 信毎書籍出版センター
- 富元久美子 2012 「飯能の遺跡 (39) 張摩久保遺跡第 31 次調査・第 33 次調査 芳ヶ谷遺跡第 2 次調査・第 3 次
調査 芋久保遺跡第 5 次調査 道間遺跡第 2 次調査」 飯能市教育委員会
- 中島誠 2002 「群馬県における縄文時代早期から中期初頭の打製斧形石器」『石斧の系譜—打製斧形石器の出現から
終焉を追う—予稿集』 pp57-62, 岩宿フォーラム実行委員会
- 橋本勝雄 2014 「本ノ木型尖頭器・木葉形薄型尖頭器、そして移行期の石器編年」『石器の変遷と時代の変革
—旧石器から縄文石器へ—予稿集』 pp56-67, 岩宿フォーラム実行委員会
- 橋本勝雄 2018 「神子柴型石斧の実態とその意味」『神子柴系石器群とはなにか?』 pp38-43,
八ヶ岳旧石器研究グループ
- 水村雄功・大久保聡 2018 「南関東北西部の様相」『大形尖頭器の技術組織—岩宿時代の終焉を探る—予稿集』
岩宿フォーラム実行委員会

研究紀要 第35号

—設立40周年記念号—

2021

令和3年3月10日 印刷

令和3年3月18日 発行

発行 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<https://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社